

室が時期差を持つことも考えられるので、この土器によって示される時期が必ずしも古墳の築造時期であるとは限らない。これについては、現状では多くの解釈が可能であるが、今後の検討に待つことにしたい。

以上のように、鶴尾神社4号墳出土の土器は、これまで古墳からは出土しないとも考えられていた時期まで遡る可能性が強く、そのことは、我国における古墳の成立・伝播に密接に関わる重要な問題を提起したものと言うことができよう。

(3) 県内の竪穴式石室について

香川県内には前方後円墳をはじめとした前期古墳が多く、したがって竪穴式石室も多く知られている。⁽³²⁾ 詳細な内容が報告されたものは多くないが、それでも時期や地域によってあるいは積石塚と土盛り墳とで若干の変化・相違が認められる。したがって、ここでは積石塚と土盛り墳とに分けて、壁面構造と規模を中心にして、既知の竪穴式石室をみてゆくこととする。なお、ここでは剖抜式石棺を納めた石室は含まないことにする。

まず、積石塚の竪穴式石室をみると、鶴尾神社4号墳は前述のように、安山岩板石積みで規模が大きいこと、特に高さが高く、側壁は床面から50~60cmまでをほぼ垂直に積み上げ、コーナーは直角に組合せるが、それから上を持送りとして、コーナーには両壁にまたがる石材を用いることを特徴とする。

香川県内には、側壁の高さが⁽³³⁾1.4mを越える竪穴式石室はほかに、猫塚古墳「中円部」に残存する1基があげられる。猫塚古墳の石室は、破壊が著しいため長さははっきりしないが、幅は1.1~1.18mと広く、高さは1.73m以上もある。側壁には安山岩塊石や分厚い板状安山岩を用いており、この点は鶴尾神社4号墳と異なるが、床面から約50cmまでをほぼ垂直に積上げてコーナーを直角に組み、それ以上を持送りとして、コーナーに隅丸状に配する石材をもつことは一致する。しかも、鶴尾神社4号墳と同じく、大きな天井石は持っていた証拠は認められないものである。

⁽³⁴⁾ 坂出市爺ヶ松古墳（第28図3）や善通寺市野田院古墳の石室は、分厚い板状安山岩や、一部には塊石ぎみの安山岩を用いるなど、用材からみれば猫塚古墳に類似する。しかし、石室の幅と高さ、特に高さが1.2~1.3mと低くなり、このためか、猫塚古墳ほど明確に側壁下部を垂直に積上げず、床面から持送りする部分も認められる。側壁下部の垂直な石積み部分の不明瞭化、ないしは省略を考えることもできる。なお、石室下部が埋って詳細は明らかでないが、側壁の持送り構造からみて、高松市横立山経塚古墳も同様な構造をもつものと考えられる。

⁽³⁵⁾ 善通寺市大塗経塚古墳・坂出市ハカリゴーロ古墳の石室は長さが3.5~3.6mと短くなり、幅、高さとも1m以下となって小形化している。同時に、側壁の持送りは少なくなって、コーナー上部の隅丸構造も顕著でなくなる。石清尾山古墳群において、かつて「切通し上の石塚」とし

て報告された石室も、このタイプに属するものと思われる。

坂出市すべり山2号墳の第1石室は、長さ2.76m、幅0.7～0.75m、現状での高さ約0.8mを計る小形の石室であるが、一方の小口壁の下部には塊石を用い、側壁やコーナー部分の持送り構造も顕著である。また、側壁の持送り構造の詳細は明らかでないが、石清尾山「北西端石塚」の石室もほぼ同規模で、長側壁下部に塊石を用いている。⁽³⁹⁾

高松市石清尾山石船塚古墳後円部・前方部・「山裾石塚」・坂出市すべり山2号墳（第2石室）・綾歌町横峰2号墳などでは、板石や塊石を用いた2m以下の石室が発見されている。古墳の中心的な埋葬主体でない場合も多く、石船塚後円部・「山裾石塚」の石室には、一部に箱式石棺の手法が認められる。⁽⁴⁰⁾

以上のほか、特殊なものとして、箱式石棺を竪穴式石室で覆ったものが石清尾山摺鉢谷で発見されている。⁽⁴¹⁾

以上の竪穴式石室を出土遺物からみると、鶴尾神社4号墳出土の壺は酒津式・庄内式に平行する可能性が強く、我国最古式の古墳と考えられる。これに対して、猫塚古墳や大窪経塚古墳出土の壺は丸底化し、新しい傾向が認められる。また、ハカリゴーロ古墳・石船塚古墳（後円部石室）・横峰2号墳は、三角縁神獣鏡以外の仿製鏡を出土することから、ほぼ4世紀後半以後に比定できる。猫塚古墳は、仿製三角縁三神三獸獸帶鏡のほか、前漢鏡1・後漢鏡3・石釧・筒形銅器・銅劍・土師器壺などを出土している。出土状態は明らかでないが、複数の石室が確認されているので、これらが数次にわたる副葬品であり、その下限が4世紀半頃であることも考えられる。また、鶴尾神社4号墳・爺ヶ松古墳・野田院古墳からは土師器と思われる土器片が出土しているが、石船塚古墳ではほかに埴輪も出土し、新しい様相が認められる。墳丘をみると、鶴尾神社4号墳、爺ヶ松古墳の前方部は明瞭にバチ状に開き、特に爺ヶ松古墳の墳丘規模が岡山県湯場車塚古墳に類似することは注目される。

以上のことからすれば、積石塚の竪穴式石室は、鶴尾神社4号墳のように長大で特に高さが高いものから、短くて幅・高さとも小さいものへと変化する傾向を認めることができる。

しかも、これらの竪穴式石室各々の細かな年代は別にして、石室構造が系譜関係を持つとすれば、上述の年代観からみて、爺ヶ松古墳・野田院古墳の石室は、鶴尾神社4号墳の石室下部の垂直な構築部分の不明瞭化ないしは省略として理解できる。さらに、すべり山2号墳第1石室は、その小形化であろう。一方、ハカリゴーロ古墳・大窪経塚古墳の石室は、先行するものが発見されていないが、鶴尾神社4号墳の側壁下部が強調され、上部まで垂直に構築された長大な石室の存在を想定すると、その小形化として把えることができよう。また、長さ2m以下の小石室は、すべり山2号墳第1石室や、ハカリゴーロ古墳などのさらに小形化と考えることができる。

以上の積石塚の堅穴式石室をまとめると次のようになる。

A. 5 mに近い規模で、側壁は高く、下部を垂直に積上げたのち、上部を持送り構造とする。

鶴尾神社4号墳がこれにあたる。猫塚古墳の石室は、長さ以外はよく一致する。きわめて近い関係にあることが考えられる。

B. 5 m前後の長さで、Aタイプよりむしろ長いが、幅、高さとも小さくする。側壁の持送り構造は顕著であるが、下部の垂直な構築は、不明瞭化ないしは省略されている。爺ヶ松古墳、野田院古墳がこれにあたる。

C. 4～5 mの規模で高さはBタイプと同程度である。側壁の持送り構造は顕著でない。未確認であるが、Aタイプから派生し、後述のEタイプにつながるものと思われる。

D. 3 m程度の規模で、側壁の持送り構造が顕著なもの。Bタイプの小形化と考えられる。すべり山2号墳第1石室がこれにあたる。

E. 3 m以上の規模を持ち、側壁の持送り構造があまり著しくないもの。仮定のCタイプの小形化である。ハカリゴーロ古墳・大窪経塚古墳がこれにあたる。なお、EタイプとDタイプは時期的にはほぼ対応し、CタイプとBタイプも対応することが考えられる。

F. 2 m以下の長さのもので、D、Eタイプの小形化したもののはか、箱式石棺との関連が考えられる。中心的な埋葬主体でない場合も多い。石船塚古墳・石清尾山「山裾石塚」・すべり山2号墳第2石室・横峰2号墳などがこれにあたる。

G. 特殊なものとして、箱式石棺を堅穴式石室で覆ったものがある。石清尾山摺鉢谷で確認されている。

次に土盛り墳の堅穴式石室をみることにする。

寒川町雨滝山奥10号・11号墳・大川町大井遺跡C地区⁽⁴⁵⁾の石室は、詳細は公表されていないが、前述した石室とは全く異なる。奥10号墳1主体（第28図1）でみると、側壁は上開きの傾斜を持ち、墓拡の内壁に塊石を貼りつけようにして築き、天井石は架構されなかったようである。そして、この石室は兵庫県加古川市西条52号墳に類似するとし、伴出土器から弥生時代終末～古墳時代初頭に比定されている。⁽⁴⁶⁾

雨滝山古墳群では、奥13号・14号墳でも無蓋と考えられる石室が調査されている。いずれも粘土床を持ち、側壁は上開きにならない。長さ3 m、幅0.5 m程度の大きさで、高さは保存の良いもので0.7 mを計る。無蓋であること、規模が類似することから、奥10号・11号墳からの変化、成立の可能性が考えられる。古墳時代に下るものであろう。

奥3号墳⁽⁴⁷⁾は、京都府椿井大塚山古墳と同范の三角縁三神五獣鏡が出土したことなどから、県内でも最古の前方後円墳の一つとされてきた。ただ有蓋の石室は、長さ3.8 m、幅、高さとも0.6 mで、積石塚古墳の石室規模からみれば特に古くすることはできない。しかし、雨滝山古

墳群には規模の類似した無蓋竪穴式石室があることから、それらを背景としてこの地域の中で成立したことも想定できるのではないかと思われる。この点については、雨滝山古墳群の詳細が公表されたのち、改めて考えてみたい。

高松市円養寺遺跡のA・C・D地区でも、長さ2.7~2.97mの小規模な竪穴式石室が発見されている。⁽⁵¹⁾ A地区の石室は安山岩板石の側壁基底部をわずかに残すのみであったが、C・D地区の石室（第28図2）は粗雑な塊石積みの側壁が0.6~0.8mほどの高さで検出された。側壁は上方に傾斜して開く構造はとらないが、裏込めをほとんど用いない貧弱な構造は、天井石が本来架構されなかったことを示唆する。石室規模や構造からみて、奥10号・11号墳などからの系譜を引くものと考えられる。

以上の石室に対して、大川町古枝古墳の石室は長さ4.47m、幅0.87m、高さ1.2mを計り、⁽⁵²⁾ 顕著な持送りをもつなど、規模・構造が全く異なる。これに類似するものとして、河原石で持送り構造の長大な石室を構築した長尾町丸井古墳第1石室があげられる。⁽⁵³⁾

なお、丸井古墳の周辺には河原石積みの石室が多く、以下の古墳が調査されている。長尾町稻荷山古墳・⁽⁵⁴⁾ 大石神社古墳の石室は、長側壁が一方の小口で徐々に狭まり、平面形が長大なくさび形をなす特異な構造である。⁽⁵⁵⁾ また長尾町川上古墳は5世紀後半の須恵器や甲冑を出土しているが、石室は奥11号墳に類似したものであった。ただし、これが奥11号墳などの石室と系譜関係を持つかどうかは、あまりにも時期が異なるため、明らかでない。ともあれ、長尾町南部には、この地域で最古と思われる丸井古墳以来河原石積みの石室の伝統があり、しかもそれが特異な構造を持つことは、この地域の特色として注目される。

高松茶臼山古墳第1石室（第5図）は、長さ5.9m、幅・高さとも1mを越える規模を持つが、側壁の持送りやコーナーの隅丸構造は顕著でない。石室の形は長大な箱形に近い。積石塚の石室で、未確認ながらCタイプとしたものである。

龍王山古墳の石室（第28図4）は5.9mの長さを持つが、幅・高さとも0.8mと小さい。側壁は持送りがほとんどなく、高松茶臼山古墳第1石室の幅・高さを小さくしたものとみることができる。詳細は公表されていないが、綾南町津頭東古墳第1主体も同様な構造とみられる。⁽⁵⁶⁾

津頭東古墳第3主体や高松茶臼山古墳第2石室は、龍王山古墳の石室などと同程度の規模をもち、構造も類似するが、側壁の一部ないしすべてを河原石や塊石で構築する。両石室の地域は、河原石積みや塊石積みの伝統を持たないので、後述する5世紀後半代の河原石、塊石積みの石室との関連が考えられる。

土盛り墳の小規模な石室はあまり調査されていないが、観音寺市鹿隈カンス塚古墳の石室は、側壁の基底に分厚い板石を立て、その上に板石を積むもので、箱式石棺の影響が認められる。

また、長尾町西山田古墳の石室は、箱式石棺を竪穴式石室で覆ったもので、石清尾山摺鉢谷

の積石塚でも知られている。

5世紀後半代になると、大川町大井七ツ塚4号墳・長尾町川上古墳・綾南町浦山3号・4号墳・津頭西古墳・綾上町末則古墳などのように、河原石や塊石を用いた石室が広く認められる。⁽⁶²⁾⁽⁶³⁾⁽⁶⁴⁾⁽⁶⁵⁾

長さ2.5m前後のものが多いが、津頭西古墳は4mと伝えられ、そうだとすると、津頭東古墳第3主体や高松茶臼山古墳第2石室との関連が考えられる。

以上の土盛り墳の石室を出土遺物からみると、奥10号・11号墳はこれに伴うとみられる土器から、弥生時代終末～古墳時代初頭とされている。一方、丸井古墳の前方部端から検出された壺は、口頸部が大きく朝顔形に開き、丸底ぎみの小さな平底を持つものであった。龍王山古墳、高松茶臼山古墳、津頭東古墳からは埴輪の出土を伝える。奥3号墳は、京都府椿井大塚山古墳と同範の三角縁三神五獣鏡を出土し、奥14号の2石室・古枝古墳・丸井古墳第2石室・高松茶臼山古墳第1石室・津頭西古墳から舶載鏡を出土している。これに対し、円養寺遺跡C地区主体部・津頭東古墳第1主体からは、いわゆる小形の仿製鏡を出土する。高松市茶臼山古墳第1石室の碧玉製鍬形石は、大阪府大師山古墳・紫金山古墳に類例のある古式のものである。また、丸井古墳第1石室出土の大形柳葉鉄鎌は、大石神社古墳出土品と類似している。⁽⁶⁶⁾⁽⁶⁷⁾

5世紀後半代とした各石室からは、いわゆる第I型式の須恵器を出土している。

土盛り墳の堅穴式石室は、地域や墳丘規模による差が大きいので一概にはいえないが、前方後円墳やこれに準じる古墳の石室をみれば、やはり長大で幅・高さの大きいものから、長くはあるが幅・高さの小さいもの、さらに短小なものへと変化する傾向が認められる。以上をまとめると次のようになる。

- a. 上開きの傾斜する側壁を塊石で構築した石室。上縁で長さ3m、幅1.5m、床面で長さ2m、幅0.5m、高さ0.5m程度の規模を持ち、天井石は持たなかったものと考えられている。奥10号・11号墳や大井遺跡C地区主体部がこれにあたり、出土土器から弥生時代終末～古墳時代初頭とされている。
- b. aタイプの石室から変化したと考えられるものをここに一括する。側壁は上開きにならず、ほとんどが粘土床を持つことから、より完成した堅穴式石室と考えることができる。長さ3m、幅0.5m、高さ0.6m程度の規模を持つ。奥13号・14号墳、円養寺遺跡A・C・D地区主体部がこれにあたる。
- c. 奥3号墳の石室で、天井石を持つが、bタイプの石室と密接な関係を持つと思われる。
- d. 長さ4.5m、幅0.8m、高さ1m程度の大きさを持ち、側壁は持送り構造が顕著である。古枝古墳・丸井古墳第1石室がこれにあたる。積石塚古墳のBタイプに最も近い。ただ、丸井古墳の伴出土器は、鶴尾神社4号墳の土器とあまり違わない時期に比定できると思われる所以、このタイプの石室は鶴尾神社4号墳の石室にきわめて近い時期に成立していたこ

とが予想されるとともに、元来別の系譜に属し、同時期に併存していた可能性もある。

e. 長さ 4.5～6 m を計り、平面形は長大なくさび形を呈する特異な構造をもつ。稻荷山古墳、大石神社古墳など、長尾町南部に 2 例確認されており、この地域の特殊例と思われる。

河原石を用いることからかつて 5 世紀前半頃と考えたが、この地域では河原石が古くから用いられているため、さらに古くなる可能性が強い。

f. 側壁の持送り構造はわずかで、石室が長大な箱形をなす。高松市茶臼山古墳第 1 石室がこれにあたり、時期的には土盛り墳の d タイプと重複するものと思われる。積石塚で未確認の C タイプとしたものに最も近い。

g. 長さ 5～6 m、幅高さとも 0.8 m 程度の大きさで、側壁の持送り構造はほとんど認められない。f タイプの石室の幅・高さを小さくしたものと考えられる。長さは異なるが、積石塚の E タイプに対応するものと思われる。龍王山古墳・津頭東古墳第 1 主体がこれにあたる。

h. g タイプと規模・構造が類似するが、側壁に河原石や塊石を用いたもの。高松茶臼山古墳第 2 石室・津頭東古墳第 3 主体がこれにあたる。

i. 長さ 2 m 以下の小石室で、鹿隈カンス塚古墳の石室には箱式石棺の影響が認められる。積石塚古墳の F タイプに対応し、これにも箱式石棺の影響が認められる。

j. 箱式石棺を竪穴式石室で覆ったもので、西山田古墳がこれにあたる。積石塚にも同様なものが認められる。

k. 河原石や塊石を用いた石室で、5 世紀後半代の須恵器を出土している。長さ 2.5 m 前後のものが多い。積石塚にはこのタイプ、特に河原石を用いた石室はなく、須恵器を出土したものも見当らない。

前述したように、鶴尾神社 4 号墳の石室は県内最古の竪穴式石室と考えられるが、こうした長大な石室が県内の弥生時代社会の中で徐々に形成され、古墳の埋葬主体として採用されたという証拠は得られなかった。現在のところ、古墳の埋葬主体としての長大な竪穴式石室は、県内においても「突如として」成立したとしかいえない状況である。

一方、鶴尾神社 4 号墳に類似する石室を県外に求めると、京都府元稻荷古墳⁽⁶⁸⁾が最も近い。元稻荷古墳の石室は長さ 5.56 m、幅 1.02～1.32 m、高さ 1.9 m で、やや長いものの、幅、高さとも鶴尾神社 4 号墳に類似する。しかも、側壁の下部 0.95 m ほどは垂直ぎみに積上げ、コーナーを直角に組むが、それより上部は持送りが急になり、コーナーには両壁にまたがる石材を用いると観察された石室構造は、鶴尾神社 4 号墳の石室と異なるところがない。また、鶴尾神社 4 号墳の石室は大きな天井石を持たず、側壁上部が合掌形に近い形をとると推定されることも類似する。

石室構造におけるこうした類似は、両者の構築技術に共通なものがあったことを示すが、それが一方からの伝達なのか、それとも別なものから両者への伝達なのか、あるいは相互ないし他者をも含めた創造なのは現在のところ断定するだけの資料がない。両古墳に伴出した土器の型式からみれば、鶴尾神社4号墳の方が先行するようにみえるが、在地の土器が新しい時期まで残る可能性もあり、高松平野におけるこの時期の土器の様相がほとんどわかつていない現在では断定することは難しい。ともあれ、石室構造からみても鶴尾神社4号墳は我国最古式の古墳であり、しかもそれが畿内と密接な関係を持つことは注目される。

香川県下の古式の竪穴式石室、例えば積石塚のBタイプ、土盛り墳のd・fタイプは前述したように鶴尾神社4号墳の石室から変化したと考えることも可能である。しかし、規模の類似を問わないならば、高松茶臼山古墳第1石室(fタイプ)は京都府椿井大塚山古墳や、奈良県茶臼山古墳⁽⁶⁾・メスリ山古墳⁽⁷⁾に類似し、爺ヶ松古墳や古枝古墳の石室(B・dタイプ)は京都府長法寺南原古墳⁽⁸⁾や兵庫県万籾山古墳⁽⁹⁾の石室に類似しているように思われるので、必ずしも県内での変化だけでなく、これらとの関連・影響を今後考えなくてはならないであろう。

しかしながら、一方では香川県内の竪穴式石室の主軸はほとんどが東西を向くなど、畿内とは異なったあり方も示しており⁽¹⁰⁾、両地域の石室が同じ背景のもとに築造されたものでもないようである。

県内の石室を概観し、鶴尾神社4号墳の石室の位置を考えたが、残された問題も多く、これについては改めて考えてみたい。(渡部)

(註)

1. 梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』 京都帝国大学文学部考古学研究報告第十二冊 1933
2. 原田大六「鋳鏡における湯冷えの現象について—伝世による手磨れの可否を論ず—」『考古学研究』 6—4 1960
3. 上田哲也・島田清ほか『播磨大中』 1965
4. 森浩一「滝ヶ峯遺跡予備調査の記録」『滝ヶ峯遺跡発掘調査概報』 1972
5. 京嶋覚「瓜破北遺跡出土の前漢鏡片」『考古学雑誌』 67—2 1981
6. 梅原末治『日本考古学論教』 1940
7. 『アサヒグラフ』 3120 1982
8. 寺川史郎・尾谷雅彦ほか『龜井・城山』 1980
9. 堀江門也・玉井功・井藤暁子ほか『厄摩・瓜生堂』 1981
岡崎敬「日本および韓国における貨泉・貨布および五銭銭について」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982
10. 馬渕久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」『考古学雑誌』 68—1 1982
11. 註1及び小林行雄『古鏡』 1965
12. 石野博信ほか『川島・立岡遺跡』 1971
13. 間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷出土の土器」『瀬戸内考古学』 2 1958
14. 乗安和二三・山本一郎・中司照世ほか『吹越遺跡』 1972
15. 「鳴門市大麻町山の下墳墓群中間報告会資料」徳島県教育委員会 1980

16. 六車恵一「香川県木田郡牟礼村原遺跡の土器」『弥生式土器集成』資料編 1961
17. 1978年度の香川県教育委員会の調査による。
18. 古瀬清秀氏の原図による。
19. 1981年度の香川県教育委員会の調査による。なお、詳細は真鍋昌宏氏の御教示による。
20. 下澤公明ほか「百間川今谷遺跡」『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』III 1982
21. 註13に同じ
22. 註20に同じ
23. 註12に同じ
24. 松下勝ほか『播磨・長越遺跡』1978
25. 石野博信・関川尚功『纏向』1976
26. 註20に同じ
27. 1982年度の西土居古墳群発掘調査団による
28. 註1に同じ
29. 註13に同じ
30. 西川宏「前半期の古墳文化—讃岐と出雲を中心に—」『古代の日本』4 1970
31. 中野雅美・江見正己ほか『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』I 1980
32. 県内の竪穴式石室の概観については以下の文献があり、今回もそれを基礎とする。
渡部明夫「龍王山古墳調査概報」『香川県埋蔵文化財調査報告』昭和51年度 1977
渡部明夫「末則古墳調査概報」『香川県埋蔵文化財調査報告』昭和51年度 1977
33. 高松市教育委員会『石清尾山塊古墳群調査報告』1973
34. 渡部明夫『爺ヶ松古墳調査概報』1975
35. 松本敏三「野田院古墳で想う(1)」『教育香川』12 1975
36. 現地での略測及び観察による。
37. 川畠迪氏の御教示及び現地での略測・観察による
38. 註1に同じ、野山4号墳の下に位置した。
39. 川畠迪氏の御教示及び現地での略測・観察による
40. 註1に同じ、北大塚西古墳をさす。
41. 註33に同じ
42. 註1に同じ
43. 註1に同じ、石清尾山23号墳をさす。
44. 註1に同じ、摺鉢谷東小積石塚群の一基
45. ゴルフ場埋蔵文化財発掘調査団『ゴルフ場埋蔵文化財発掘中間概報』1972
松本敏三ほか『雨滝山遺跡群』1973
46. 六車恵一ほか『大川町史』1978
47. ゴルフ場埋蔵文化財発掘調査団『ゴルフ場埋蔵文化財発掘中間概報』1972
48. 註47に同じ
49. 註47に同じ
50. 梅原未治「椿井大塚山古墳」『京都府文化財調査報告』23 1964
51. 円養寺遺跡発掘調査団「高松市円養寺遺跡調査概報」『香川県文化財協会報特別号』10 1972
52. 註46に同じ
53. 1982年に長尾町教育委員会が調査
54. 和田正夫「大川郡長尾町稻荷山古墳」『香川県文化財調査報告』1 1951
55. 筑後正治ほか『長尾町史』1965
56. 註53に同じ
57. 茶臼山古墳発掘調査団『高松市茶臼山古墳調査概報』
58. 渡部明夫「龍王山古墳調査概報」『香川県埋蔵文化財調査報告』昭和51年度 1977
59. 松本豊胤『古墳その2、茶臼山と津頭東』『郷土資料室制品目録』第6期 1970
60. 廣瀬常雄『日本の古代遺跡』8香川 1983
61. 註55に同じ

62. 註46に同じ
63. 松本豊胤ほか『香川県文化財調査報告』10 1969
64. 高橋邦彦ほか『さぬきの遺跡』1972
65. 渡部明夫「末則古墳調査概報」『香川県埋蔵文化財調査報告』昭和51年度 1977
66. 綱干善教ほか『大師山』1977
67. 小野山節編『古代史発掘』6 1975
68. 西谷真治「向日町元稻荷古墳」『京都府文化財調査報告書』23 1965
69. 中村春寿・上田宏範『桜井茶臼山古墳』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』19 1964
70. 伊達宗泰・小島俊次ほか『メスリ山古墳』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』35 1977
71. 梅原末治「乙訓村長法寺南原古墳の調査」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』17 1936
72. 梅原末治「摂津万籾山古墳」『近畿地方古墳墓の調査』2 1937
73. 徳島県博物館天羽利夫氏の指摘による。